

股関節温存手術 —寛骨臼側股関節周囲骨切り術—

introduction

関節外科の手術術式のなかでも、股関節骨切り術は次世代に継承していくための技術として再注目されています。本特集の内容は日本股関節学会でも積極的に事業として取り入れられ、その教育委員会による「骨切りセミナー」からヒントを得ています。また、日本股関節学会のポストコンgresとして「股 Osteotomy を語る会」が専門的な研究会として開催されていますが、ここ数年では次世代の股関節外科医の参加者も急増しています。その時代の潮流に乗って本特集を企画させていただきました。

その股関節周囲の骨切り術のなかでも、特に寛骨臼側の股関節周囲骨切り術は技術レベルはより高くなりますが、股関節症の病期が前・初期であれば将来の人工股関節置換術を回避できる可能性も高く、また手術方法も多彩です。本特集の狙いは、寛骨臼側股関節周囲骨切り術が再注目されているなかで、その手術技術のコツやピットフォールを1冊にまとめて、次世代の関節外科医に届けることです。このような最新の手術手技まで網羅した雑誌や書籍はしばらく発行されておらず、そのため次世代の外科医に残しておくには、今がベストなタイミングと考えました。

ここ数年でさらに股関節骨切り術の技術は進歩し、手術支援技術の利用も相まって、さらなる進化を遂げています。しかしながら、やはり THA のようにいつもやり慣れている手術ではありません。そのため、キャダバートレーニングやセミナーを含め、経験豊富な指導医のいる施設のもとで研鑽を積み、股関節チームとして実施していくことが、患者への有効性や安全性を考えたときには望まれます。そのため、寛骨臼側股関節周囲骨切り術の最前線の施設、さらにはレジェンドの股関節外科医の先生方にご依頼して、非常にご多忙のなかでご執筆いただきました。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。本特集は、キャダバートレーニングやセミナーなどのテキストとしても、十分に活用できる内容に仕上がっていると確信しています。

「骨切り術ができるけれど結果的に THA を行った場合」と、「骨切り術ができないので THA を行った場合」では、意味合いはまったく異なります。単に骨切り術の術式が術者の選択肢にないだけで、患者へのインフォームド・コンセントや骨切り術自体がなされないことはあってはなりません。ただし、将来的に THA が必要になった場合を想定して、バトナリレーのように、その後に行われる THA を妨げるような骨切り術をしなければなりません。

骨切り術には「生体の適応力の妙」をうまく活かせる要素があります。骨切り術はただ関節を残すだけではありません。そのためにはそれなりの技術は必須です。骨切り術の技術がなくならないように、必ず次世代に継承する必要があります。本誌が次世代の股関節にかかわる外科医のバイブルになることを強く願っています。

北里大学大学院医療系研究科
高平尚伸